

『幼なじみは魔界の王子』

著：神香うらら

ill：こうじま奈月

「——よう、ジア。ミッションはまたしても失敗だな」

頭上から降ってきた低い声に、はっとして体を起こす。

「ラシード……！　なんでこんなところに!？」

腕を組み、不(ふ)遜(そん)な表情でジアを見下ろしていたのは、よく見知った顔だった。

見上げるような長身に、がっしりとした逞(たくま)しい体。浅黒い肌に漆(しっ)黒(こく)の髪と黒い瞳を持つ、魔界の第三王子。

そして……ジアの幼なじみでもある。

「なぜこんなところにいるのかって？　偵察だ。我が婚約者の仕事ぶりが心配でな」

「な……っ、こ、婚約なんかした覚えはない！」

「婚約披露の宴(うたげ)の日取りも決めておいたぞ」

「俺に無断で話を進めるな！」

青い瞳を大きく見開いて、ジアは身勝手な幼なじみを睨みつけた。

黒曜石のような瞳でジアを見つめ、ラシードがその肉感的な唇に笑みを湛(たた)える。

「ジア……おまえの花嫁姿はさぞかし……」

大きな手に顎をすくわれそうになり、慌ててジアは尻であとずさった。

「いっ、今その話はいい！　それよりおまえ、さっきの人、どこまで飛ばしたんだ!？」

「心配ない。自宅のベッドまで送り届けただけだ。目が覚めたときには何も覚えていないさ」

とりあえずほっとするが、ため息をついて膝(ひざ)を抱(かか)える。

「どうしてくれるんだよ……またランクが下がっちゃう……」

「気にすることはない。ランプの精としては無能でも、おまえは第三王子の婚約者だ」

「慰(なぐさ)めるにしても、もうちょっと言葉選べよ……」

「おまえにこの仕事は向いてない。早く俺の嫁になれ」

「おまえなあ、年下のくせに生意気だぞ」

むっとして、ジアは唇を尖(とが)らせた。

ジアは二百歳、ラシードは百八十歳。魔界の住人は千年生きるの、人間界でいうところの二十歳と十八歳くらいだろうか。

「魔界の二十年なんて誤差の範囲内だ」

「そうはいつでも、俺はおまえの子守役だったんだぞ。よちよち歩きのおまえをおんぶしたり抱っこしたり、絵本を読み聞かせて子守歌を歌って寝かしつけてやった相手と結婚なんて……」

ジアは代々王家に仕えている名家の生まれだ。魔界のしきたりで、王子や王女には年の近い妖精が子守役として召され、育児を手伝うことになっている。

ジアもラシードが幼かったとき、三十年ほど子守として王宮で過ごした。幼少期のラ

シードはやんちゃで暴れん坊で、ジァは散々手を焼かされたものだ。

ラシードの黒い瞳がずっと眇められ、男っぽく精(せい)悍(かん)な顔立ちが不機嫌な表情に変わる。

「それがどうした。今では俺のほうが背も高いし力も強い」

「そうだけど、俺にとっておまえは、いつまで経(た)ってもあの頃のイメージが拭(ぬぐ)えないっていうか……」

「もうあの頃(の)のガキじゃないことを証明してやる」

「えっ？ うわ、ちょ、ちょっと……っ！」

地面に押し倒されて、ジァは驚いて目を瞬かせた。

一難去ってまた一難、しかも今度の相手は魔界の王子だ。

ジァが持っている力をすべて出し尽くしても敵(かな)わない相手——。

「や、やめ……、んん……っ」

熱い唇で唇を塞(ふさ)がれて、ジァはじたばたともがいた。

(口の中だけは死守……！)

唇を強く引き結び、ラシードの舌の侵入をブロックする。

「……おい、口を開けろ」

ほんの少し唇を離し、ラシードが囁(ささや)くように命令する。

口を固く閉じたまま、ジァは首を左右にぶんぶんと振った。

——ラシードのキスには、催(さい)淫(いん)効果があるような気がする。

こうして唇を重ねるだけならまだしも、舌で口の中をまさぐられると、なぜか体中の力が抜けて抵抗できなくなってしまうのだ。

(そしたら、またあんな恥ずかしいことに……)

忘れもしない、半年前の昼下がりに。魔界の森の木陰で気持ちよく昼寝をしていたら、いつのまにかラシードがそばにいて、ジァの唇をついばんでいた。

驚いて目が覚めたときには手遅れで、不覚にもディープキスを許してしまった。

ラシードのキスの威力は凄まじかった。あっという間にジァの体を高ぶらせ、いとも簡単に勃(ぼっ)起(き)させてしまったのだ。

ジァは同世代の妖精たちの間でも特に初(うぶ)で奥手で、生(せい)来(らい)淡泊な質なのか、性欲とは無縁に過ごしてきた。射精したのも数えるほどで、もしかしたら自分は不感症ではないかと思っていたほどだ。

それがまさか、自分が子守をしていた相手に欲情を煽(あお)られてしまうとは……。

「……やめろ……っ！」

無駄だと知りつつも、ジァはラシードの厚い胸板を押しやって顔を背けた。

意外にも、ラシードは体を起こしてあっさり引き下がった。余裕たっぷりの笑みを浮かべ、ジァの瞳をじっと見下ろす。

「また服を汚してしまいそうで心配か？」

「な……っ」

真っ赤になって、ジァは口をぱくぱくさせた。

森でキスされたとき、ジァは射精してしまい……薄い布地の衣裳は恥ずかしい粗相を隠してくれなくて、ズボンを濡(ぬ)らすところをラシードに見られてしまった。

あまりにも恥ずかしくて、この半年間ジァはラシードと顔を合わせないように逃げまわっていた。

本来ならば、王子と下っ端ランプの精が顔を合わせる機会など滅(めつ)多(た)にない。加えてラシードは今年成人の証(あかし)となる百八十歳を迎え、さまざまな行事に忙(ぼう)殺(さつ)されている。

なのでジアも時折王宮でちらりと姿を見かけるくらいで、あれ以来ふたりきりになったことはなかったのだが……。

「俺はそろそろ王宮に戻らねばならん。婚約の件は、またあとでゆっくり話そう」

「だから……っ、俺はおまえとは結婚しないって……っ」

起き上がって乱れた服を直しながら、ジアはもう何度目になるかわからない言葉をくり返した。

ラシードが立ち上がり、笑みを浮かべる。

「現実を見ろ。今回の失敗でランク最下位は確定、あと一回失敗したらランプの精の資格は剥(はく)奪(だつ)だ。魔界で生きていくには、元ランプの精という不名誉な肩書きよりも第三王子の花嫁のほうがずっといいぞ」

「まだ剥奪と決まったわけじゃない！ この次は絶対に失敗しない……！」

「まあせいぜい頑張るんだな」

憎たらしいセリフを残して、ラシードの姿が煙のようにかき消えてゆく。

ラシードほどの魔力の持ち主なら、魔界と人間界の行き来もあつというまだ。けれど魔力不足のジアは、これから丸一日かけて魔界へ戻らねばならない。

地面に尻(しり)餅(もち)をついたまま、ジアははあつとため息をついた。

(さっきは強がっちゃったけど、ほんと今の俺は崖(かた)っぷちだ……)

あと一回失敗したら資格剥奪、という現実が重く心にのしかかってくる。ランプの精として生まれた者が資格を剥奪されるのは、魔界では大変不名誉なことなのだ。

(それに……俺だけの問題じゃないし)

ジアの両親は優秀なランプの精だった。

両親ともに最上ランクの栄冠を手に入れ、今は名誉ランプの精として魔界で悠(ゆう)々(ゆう)自(じ)適(てき)に暮らしている。兄と姉も常にランクの上位におり、ジアだけが落ちこぼれで肩身の狭い思いをしてきた。

魔界では、家族の名誉が重んじられている。資格剥奪となれば、それはジアひとりの問題ではなく、家族みんなに迷惑をかけてしまうことになる。

(両親の名誉を汚すようなことだけはしたくない)

顔を上げ、ぐっと拳(こぶし)を握り締める。

次は絶対に失敗しない。どんな手を使ってでもミッションをクリアし、ランクを上げなくては。

そう自分に言い聞かせ、ジアはもう一度ため息をつきながら立ち上がった。

本文 p19～26 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>